

北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 32号

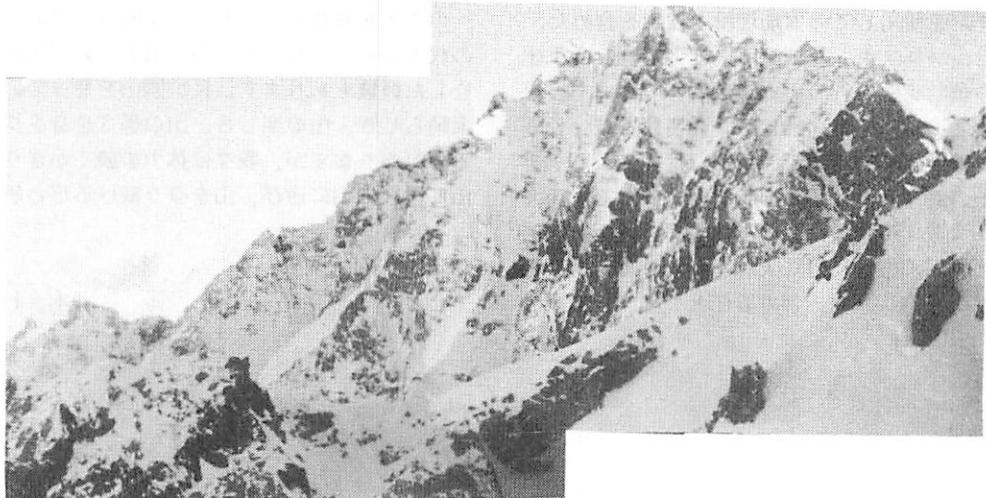
1999年1月~3月



ACC-J茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and Valley 99'冬 No 32



厳冬期の滝谷 《Photo by kimura》

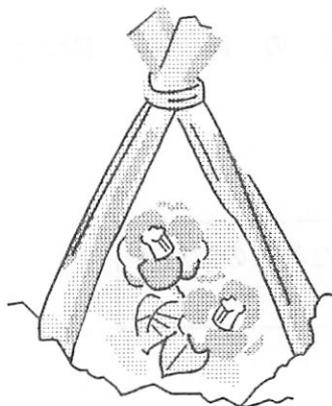
雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

セルフレスキュ&自己責任について

先日、東京都山岳連盟遭難対策委員会主催の冬山レスキューリーダー養成講習会に参加し、受講してきました。今回はビーコンを使用して雪崩埋没者の搜索を中心とした冬山でのセルフレスキューテchniqueについての講習&訓練でした。自然をフィールドとして活動する登山は山奥に入る機会が多く、我々が目的としている岩壁登攀・渓谷廻行・山スキー等で負傷した場合にはセルフレスキューテchniqueが前提になります。勿論、遭難の状況によっては救助隊の要請が必要になる事は充分承知していますが・・・。しかし、いざセルフレスキューテchniqueを実行しようとしてもその技術、ノウハウを知らなければ手も足も出ません。やはり毎年訓練して技術を習熟しておく必要があると思います。我々の山岳会では毎年岩壁での遭難者救出訓練を実施していますが、今後はビーコンを使用しての雪崩埋没者搜索を含めた、冬山でのセルフレスキューテchniqueについての訓練と合わせた年2回の救助訓練山行の実施が必要と考えます。我々の山岳会もメンバーが高齢化し、会員数も減少しているので条件が厳しい場所での遭難には、ACC-J茨城単独での遭難救助は難しい状況にあるので、今後のセルフレスキューテchnique訓練は、茨城県山岳連盟所属の他山岳会との合同訓練も視野に入れて計画する時期と考えます。登山を趣味とする者の責任として自分の事は

自分で始末出来る事が最良ですが、時には他人の事でも偶然そこに居合わせた人達が協力して、遭難救助に当たった例は數多くあります。しかし、セルフレスキューテchniqueを知らない人ばかりでは救助もおぼつかない事は火を見るよりあきらかです。山へ登る者の自己責任としてセルフレスキューテchnique&救急救命技術の習得は不可欠と考えるのは私1人ではないと思います。また、遭難費用についても民間のヘリコプターを飛ばした場合には、1時間で100万円の請求は常識であり、冬山で遭難して地元の救助隊を要請した場合には更に相当の費用請求があると聞いております。登山を趣味とする者の自己責任として日山協の山岳保険及びその他の保険に加入する事が義務とも思います。我々の山岳会では会員(OB会員は除く)は日山協の山岳保険への加入を義務化し、万一の保険金の受取人は山岳会の代表者にしておりますが、過去に数回保険金の請求をした経験もあります。長い間山を登っていると山の素晴らしさ、山の楽しさ、山の恐さを身を持って感じる事がありますが、我々は体力の続くかぎり、今後も山に学び、山に遊び、山を登り続ける事と思います。

(木村一)



《目次》

1999年 冬号 1~3月 ACC-J茨城

レスキュー&自己責任について	1
集会報告	3
山行報告	4
冬山合宿・滝谷・クラック	5
高妻山(冬合宿別動隊日記)	6
スポーツとサプリメント	8
氷瀑登攀転じて県北ドライブ	9
エビス尾根(仮称)	9
C級指導員・講習会・安達太良山	11
宮之浦岳と開聞岳	12
冬山レスキュー講習会に参加して	14
はじめちゃんの想い出日記《Part 8》	15
栗駒山山スキー	16
荒沢尾根(敗退)	17
氷ノ山・山スキー	18
逆・深夜鉄行(後編)	19
友好山岳会団体の月報・会報・その他	27
編集後記	29

表紙…冬期滝谷・クラック尾根三ピッチ目の登攀

《Photo by sasahira》

集会報告

(於、スカイマークガーデン)

-----【 1月 】-----

1月 6日

出席者 本団、木村、菊池、古山、笹平

1月 20日

出席者 本団、古山、木村、鯉河、中島、菊地、笹平、高木

-----【 2月 】-----

2月 3日

出席者 本団、木村、菊地、中島、笹平

2月 17日

出席者 本団、木村、菊地、鯉河、笹平

-----【 3月 】-----

3月 3日

出席者 本団、木村、古山、菊地、笹平、中島、生井、遠藤

3月 17日

出席者 本団、古山、木村、菊地、鯉河、中島、笹平

山行報告

《 1999年 1月～3月 》

【 1月 】

12月29～1月3日	穂高・滝谷	L古山、笹平
12月31～1月1日	高妻山	L本団、木村、生井
1月1～2日	乗鞍岳	中島
1月15日	花園渓谷（七ツ滝）	L本団、古山
1月24日	三ツ峠・四十八滝沢	L本団、古山
1月29～31日	赤谷川・エビス尾根	本団、他2名

【 2月 】

2月6～7日	安達太良山	笹平
2月12～14日	宮之浦岳	古山
2月27～28日	谷川岳。冬山救助講習	本団、木村、古山、笹平

【 3月 】

3月20日	栗駒山	L中島、木村、菊地、笹平
3月20～21日	荒沢尾根	L本団、古山
3月27～28日	水ノ山	古山、高田、他2名

冬合宿・滝谷・クラック尾根

12.29~1999.1.3

パーティ L古山正文、笹平孝

今年の冬合宿は滝谷に決まつたので、まずは防寒対策として手袋やダウンジャケットなどを買つてきつた。それと今回は、軽量化の為に8.5mmのロープを買つた事になつた。谷和原ICから松本ICまで高速道路を乗つたので、新穂高温泉まで楽に行く事が出来た。

12/29。雪不足なのでスキー場にはほとんど雪が積もつてなかつた。白出沢出合までは他のパーティが目立つたが、ここから涸沢岳西尾根に行くパーティは少なかつた。尾根沿いに樹林帯の中を進んで行くと2400mの所に広いテント場があり、ツェルトを張る。ここは人気があるようで夕方には満員になつてゐた。そのうち雪が降りだし、積もり始めた。天氣予報ではこれから冬型の気圧配置が強くなるという事なのでがっかりした。

12/30。朝から吹雪でテントから出たくない程だ。すでに数パーティは出発しているのにトレースはほとんど埋まつてゐるので、踏み外さない様に注意しながら歩いて行く。樹林帯を抜けるといつそう風当たりが強くなる。このような所にもテントがちらほらと目につく。F沢のコルの所はやせ尾根で、滝谷側に雪庇が張り出しているので白出沢側を通るが、腰まで埋まるラッセルで、たまに2mくらいの亀裂が走り、今にも雪崩そうでとても緊張した。涸沢岳の稜線に出ると飛騨側からの風がとても強く、雪の氷化した物が顔にあたりまともに歩くことができない。やっとの思いで穂高岳山荘につくと、天候が悪いせいか小屋はすいている。中に入ると英語を話せるか訪ねてきた。西穂から來た韓国人パーティで一人滑落したらしく、救助の要請をするために片言の英語でやり取りしてゐた。

12/31。昨日に続き相変わらず吹雪いでいる。涸沢岳からの下降地点から2ピッチ下ると、風はずいぶん弱くなる。ロープの脇を動くものがいるのでよく見ると、真白なライチョウがチョコチョコ歩いている。この先も雪崩そうな場所なので、ロープで確保しながら慎重に下る。今年はフィックスロープが至る所に張られており、特に飛騨側の水平トラバースはほとんど張られていたので、とても助かった。悪天候の中で、北穂までの移動はかなり厳しいものがある。しかし、吹雪いでいて当たり前の場所なので、行動できないと



旧メガネのコルにて

話しにならないと思う。北穂小屋に着くと1パーティいて、後からもう1パーティ來たが、滝谷を登りにきたパーティはいなかつた。

1/1。冬型の気圧配置はくずれていないのに、なぜか今日の天氣は晴れた。しかし風は強く気温は-20℃もある。小屋からB沢のコルまで4ピッチロープを使う。B沢の降り口の所は大きなクーリングタワーが勢いよく白く吹き上げているのと同じ様に見えた。下り始めると氷や小石がバチバチ当たり下に向くことができない。B沢下降中に古山さんの顔が白く凍傷になつてゐたので声をかけた。

クラック尾根取り付きへのトラバースが一部崩壊していたため、少してこずつてしまいそれから、1ピッチ目を右寄りに行かなくてはいけないのにまっすぐ登つてしまつたので、懸垂下降で途中まで戻る羽目にな

る。（私は、前もここで同じ間違いをしていた）。この後、三級の岩場が続くが、ちょっとした所で思うように進めず技術不足を痛感してしまう。旧メガネのコルは崩壊が進んでいた。手前のピークは崩れて形が少し変わっていて、つかむと今にもはがれそうな感じで、とても力をかけられない。ピークからコルまですんなり行く事が出来たはずなのに今は、1尾根側をトラバースしなくてはならなかった。とうとうここで時間切れになり、コルから懸垂下降でB沢へ降りることになった。

小屋に戻ると、単独の人が一人しかいなくて静かな夜になった。それと、二人とも手が凍傷になってしまった。

1／2。今日は、ドーム北壁の予定だったが、吹雪のため中止して一日早く穂高岳山荘に戻る事になる。途中、単独の人に二人ほどすれ違うだけだった。小屋に着くと、前よりも人数が多くなったが、あの韓国人はもう降りていた。

1／3。結局、冬型は続いて今日も吹雪いている。稜

線は風が強くて、凍傷になった指がすぐ感覚がなくなるので、片方づつ手をポケットに入れながら降りた。涸沢岳西尾根を降り始めるとき、風も弱くなり一安心だ。F沢のコルの所は、白出沢側にも雪庇ができ始めており変な形になっている。ここでまごまごしていると、後から前橋の山岳会の人たち六名がきて、効率よくラッセルしてくれてとても助かった。2400mのテント場から下は、来た時と違い雪で風景が変わっていた。

(笛平 記)

高妻山（冬合宿別動隊日記）

1998.13.30～1999.1.1

パーティ L本団一統、木村一、生井一男

「高妻山？」いったい何処の山…。んんんちょっと待てよ、確かに百名山にそんな名の山があったなあと手持ちの資料を調べてみた。すると、あった、あった。戸隠連峰の奥、戸隠キャンプ場から入山するようだ、と資料を見ながら誘われた山行を考えてみた。今年の冬合宿は最強メンバー達で、穂高・滝谷に入ると言っていたし、今の私はしばらく山から遠のいていて、現役メンバーとは体力及び気力が付いていかない。そんな事もあってこの冬合宿別動隊のパーティに加わる事を決意した（本当は某M氏の夕食はすき焼きパーティだぞ、との話にのせられた感もあるが…）。結局、この冬合宿別動隊のメンバーは、本団、木村、生井の3名で行く事になった。“ん、誰だ！”中高年ロートル登山隊だとぬかす奴は表に出ろや！。いつでもこの“ベンツ生井”がバチンコで勝負したろやないかい…！。

12月30日の夜、茨城を出発し上信越高速を通って、戸隠キャンプ場に深夜2時ごろ到着した。キャンプ場の入り口を探すのにちょっと迷ってしまったが、無事、戸隠牧場の牧場事務所の近くに車を停めて、軽く小宴をした後、就寝した。

翌朝はゆっくりと7時過ぎに戸隠牧場を出発した。牧場の開けた所を進んでいくと、樹林帯に入り、緩い登りを登っていくと沢が出てきた。雪の中の沢を対岸に渡り、ゆっくりとしたなだらかな登りを行く。次第に急登な登りになってきた。雪の斜面で不動の滝らしき場所があつたが、一杯清水の水場との記憶がいまいちはっきりしな

い（今、この原稿もはるか遠い記憶を紐解きながら書いているので、記憶違いがあるやも知れないが御勘弁願いたい）。そうこうしていると、鞍部へ突き上げる急登が現れた。あの鞍部に一不動の避難小屋がある筈だ。先頭が本団さん、そして木村さん、その後を息も絶え絶えになって続いて登って行く。膝上まで雪まみれ、所々腰まで埋まりながらも登っていくと、しっかりとした避難小屋が現れた。ここで休憩を取り、冷えた体を癒し今日は何処まで行動するかを小屋の中で行動食等を食べながら話した。その結果は……。

『五地蔵岳で天幕を張れるようがんばって行こう。あわよくば高妻山までいっちょ』と、ロートル隊の意気込みは強いものだった。

一不動の避難小屋を後にし、樹林帯の尾根道を行く。右側は切れ落ちた崖っぷちになっているし、ブッシュの上に雪がつもっていて、これがまた歩きにくく（最中雪になっていた）。トレースも無く交代でラッセルし進んでいく。暫く行くと道のわきに二釈迦と書かれた石祠が置かれていた。また暫く行くと、三文殊と書かれた石祠が出てきた。この登山道には一不動、二釈迦、三文殊、四普賢と、五地蔵岳へと道標のようにある程度の間隔でこの石祠が置かれていた。頑強な肉体と精密な知能を持った（以前は？持っていたかな）ロートル登山隊は、一不動、二釈迦、三文殊、四普賢を制覇し、今ここビベク地、五地蔵岳に辿り着いた。ザックをおろし一息したのち早速、設営開始。誰が言うでも無く指図するでもな

く圧雪、整地を行ない、すかさずテントを出し外張りを張り、そしてテントの中にテントマット、各自のマットを敷き、順序良くテントに入る。この一連の流れが、阿吽の呼吸という感じで、あっという間に暖かいテントの中に入り、暖をとった。

一息ついた後、ビールを片手に今日の山行の事とか、昔話とか、色々な事でテントの中は盛り上がった。昔の山行の話をする時なんかは、うん十年昔の青春の熱き血潮のみなぎった日々の光が瞳に輝いていた。そして待望のすき焼きパーティの始まりである。某M氏&某K氏の采配で、下界で食べるすき焼きよりもハイレベルな物が出来上がった。なんと生卵まであって箸が進むこと進むこと。お腹の中はすき焼きとビールで、Fゲージを大きくオーバーしてしまった。“もう、動けない。腹が弾ける”と3人ともアルコールの酔いと腹がふくれたせいでいつのまにかウトウトと横になっていた。暫く横になっていたが3人とも“ハッ”と気がつきシュラフを出し就寝する事にした。

翌朝、起きてみるとかなり昨晩は雪が降ったようで、テントの3分の一位が雪で埋まっていた。確かに昨夜はかなり風もあり、雪も降っていた。木村さんは何度か外に出てテントの雪かきをしたと話していた。外はかなり雪も積もっていて今日の行動は過酷なラッセルか予想された。

朝食を済ませ今日の行動を討議した結果、必要なものを持ちここからピストンで高妻山を狙う事となった。

テントを出た途端ラッセルの始まりであった。3人交代でラッセルを行なうが、新雪でひどい所は腰まであってラッセルがつらい。高妻山までアップダウンの連続で幾つかのピークを越えていく。ここでの登りのラッセルでは腰まで埋まり、頭の上の方から雪を固め足場にしながら登っていくが、かなり時間がかかるてしまう。汗まみれ雪まみれになりながらも時間を大幅に食って高妻山への尾根の基部に着いた。が、ここからのラッセルもかなりきつく、少し行くがとてもピークを踏んで帰ってこれそうもない。頑強な肉体と精密な知能を持ったロートル登山隊は、3者会談（ブレーンストーミング）をし、その結果ピークを踏むのは無理との結論に至った。

ここまで来て敗退とはとても悔しいが、ロートル登山隊も下界に戻れば各自の生活がある。それを壊してまでという道楽者ではない…？

帰還するにもピークを踏んでの帰還ではない為、何か足取りが重い。膨らんでいた風船が急に空気が漏れ萎んでしまったような思いと、つらい登りのラッセルからの解放感とでいうのか何か複雑な気分だ。幾つかのピークを越え五地蔵岳のビバーク地に戻った。テントを撤収し、四普賢、三文殊、二釈迦、一不動の避難小屋まで来た道を戻った。一不動の避難小屋から下降は降った雪のせいで腰まで埋まり下りるのに一苦労した。上半身は下りて

いるのに足がとられ頭からひっくり返って雪まみれで頭から転がっては下る。という無様な下降スタイルだ。とにかく降った雪のせいでの下降は大変だった。忠実にトレースのあった所を探して下らないと（降った雪の為痕跡が無い）体がすっぽりと雪の中に埋もれ身動き出来なくなる。ある所で私は下降時に雪に足をとられ頭から一回転転がりながらトレースを外れてしまって身動きが出来なくなってしまった。本図、木村氏は先に行ってしまっているので助けてもらう事も出来ない。少し考えていると少し下にトレースを発見。体の機能のありとあらゆる能力を使い、すぐ下のトレースまで転がっていった。助かった…。後は体の雪を払い何事も無かったように両氏の後を追った。

深かった雪も戸隠牧場まで下りてくるとかなり少なくなり、視界も開けているので気分は楽だ。しかしラッセルは膝下辺りまであり辛い事は辛い。視界が開けているのはいいのだが距離感が狂ってくるのはいただけない。一生懸命にラッセルを交代で進むが車までが遠い（この頃は本図、木村両氏に追いついて一緒に行動していた）。自分ではもっと先かなと思いながら一番最後を歩いていると戸隠牧場の関係者なのか？、子供連れアンド犬づれの家族が雪の中を遊んでいた。何やら不審に思ったのか私の後を犬が尻尾を振って付いてくる。足下にまとわり付いて噛みついてくるんじゃ無いか心配だった。そして忠犬ハチ公に伴走されながら駐車場に着いた。

今回は雪が多かった事と登山者が少なかった事でラッセル大会になってしまって私としては辛い山行だった。こんなラッセルが多い山行は、ドクター中居とか古山教授が好きな山行ではないかと思う。両氏に何時か大雪が降った時にトライしてもらい、感想を聞きたいと一人思ったルートだった。

今回は残念ながら敗退で終わったが、あまりラッセルの無い様な時にまた行ってみたいと考えていますが、何しろ余り人が入らないようなのでどうかな。ともかく今回の山行の報告はここまで…。興味のある人は本図、木村、生井まで連絡を待ちます。

では、頑強な肉体と精密な知能を持った（以前は？持っていたかな）ロートル登山隊、冬合宿別動隊（高妻山）の報告はここで終わりとします。

（生井 記）

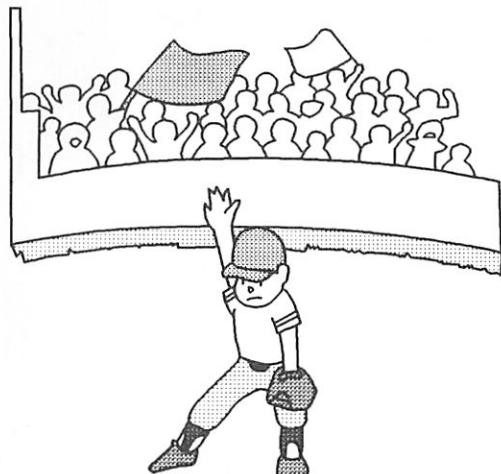


スポーツとサプリメント

昨年、大リーグでホームランの新記録争いを演じたカージナルスのマグワイヤとカブスのソーサ。この二人の争いは世界中の注目を集め、自分も毎日、テレビの大リーグ中継を固唾を飲んで見ていた。2人のホームラン争いはマグワイヤの70号で幕を閉じたが、グランドの外でも興味深い2人の違いをあるスポーツ情報誌で見つけた。マグワイヤがアンドロステンジオン（タンパク同化ステロイド）を使用していた事は、シーズン中新聞やスポーツニュースでも報道され論議を醸し出していたが、ソーサがクレアチンを使用していたのはあまり知られていない。タンパク同化ステロイドはIOCでは禁止薬物で、ソウルオリンピックでベンジョンソンが使用して金メダルを剥奪された。ソーサの使用しているクレアチンは天然に存在する栄養素で肉や魚にも含まれていてサプリメントである。タンパク同化ステロイドはアナボリック（タンパク質同化）、クレアチンは筋収縮のエネルギーとなりパワーを持続させる。使用目的と効果は異なるが、両者とも通常の食生活では到達できないレベルの身体能力を得ようとして使用されている。このようにサプリメントはアスリートの能力を最大限に引き出すものの一つとして定着している。一般の人々もビタミン錠などを飲んでいるがこれもサプリメントである。これらサプリメントは登山でも使用可能なものがたくさん出回っている。メーカーから送られてくるニュースにもフリークリマーの大岩あき子さんのトレーニング法や食事法が最近紹介されていた。ただ残念なのは山岳雑誌にはこれらサプリメントの情報は少ないので他のスポーツ分野から情報を得るしかない。大型店舗のドラッグストアやコンビニでも各種ビタミン錠やプロテインパウダーが並んでいるが品質の良い製品はあまり見掛けない。以前野球の補強トレーニングのために通っていたスポーツジムには空手、ボディビル、柔道などの選手が集まり「勝つためのトレーニング」に汗を流していた。指導者の立場の人も来ていて真剣にトレーニング法やスポーツ栄養学を話し合っていた。そこでは色々なメーカーのサプリメントが使用され少しだけ効率の良いレベルアップをはかろうとしていた。こういった登山以外の分野からの情報で、サプリメントを活用すれば特に行動食などで軽くて栄養バランスのとれたものがあ

るだろう。しかしサプリメントは安くはないので自分の行なう登山形態や普段の食生活を分析し効率良く摂取したい。選ぶ基準は①登山形態②普段の食生活③発汗の多少④運動強度⑤年齢⑥体格などがあげられると思う。たとえばアルパインでは持久力アップにビタミンE、フリーではパワー持続にクレアチン、糖質や蛋白質の効率の良い代謝にビタミンB群、運動も身体にとってはストレスなのでビタミンCだと思う。これらを実行するにはいつもサプリメントを携帯し時間を守り摂取しなければならず金銭的にも負担になるのでプロスポーツ選手やオリンピック選手でもなければ難しい。そこで私のお勧めのサプリメントは液体状のもので主に夜、摂取するもので泡のできるもの、水を入れるもの、なかには焼き枯らしたイワナを浸すもの等がある。たまにはネオン街で化粧の濃い女性が摂取のお手伝いをしてくれる液体だ。このサプリメントは水筒に入るので山行にも便利だが摂取過剰は翌日の行動に支障ができるかもしれない。

(高木 記)



氷瀑登攀転じて県北ドライブ

1999. 1. 15

パーティ L 本団一統、古山正文

北茨市の近くに花園渓谷があり、その七ツ滝というのが氷瀑登攀の対象になるということは以前から知っていた。メーリングリストでは袋田の滝を登ってきたという報告がされていた。そうかあ、じゃあ袋田は混むな、袋田は何度も行っているので、いい機会だから花園渓谷に行ってみよう。という訳で土曜の夜出発と相成った。

駐車スペースに止めて外に出てみると暖かい。傍らを流れている沢は凍っていない。これはだめだと、ヤケ酒を飲み始めた。

翌朝、滝まで行ってみるが、凍っているものの登攀は

出来そうもない薄さであった。袋田の滝に転戦することにして車を走らせるも、福島県に入るとどういうわけか路面に雪がある。雪の峠をいくつか越し118号線に出た。けっこう時間がかかってしまった。袋田に着くともう観光客がたくさんおり、凍結状態は流水の端なら登れそうだったが、私も古山もこの人波の中を登る気が起きず帰ることにする。ちなみにこの日登攀している人はいなかった。

(本団 記)

エビス尾根（仮称）

1999. 1. 29～31

パーティ 高桑信一、香内力（以上浦和浪漫山岳会）、L 本団一統

29日、晴のち雪。浦和浪漫山岳会の高桑、香内の両氏と共にスキー使用で川古温泉から入山する。香内氏とは今日が初対面である。一目で馬力がありそうな青年を見た。山の話をしても取り組みが非常に真面目である。どうして浦和浪漫にはこのような好青年が集まるのか羨ましい限りだ。ついでという訳ではないが、幾本君なんかできれば当クラブに引き抜きたいものである。

この数日間は降雪がないようで、林道は地面の露出している所があった。12月のときの例のオートバイはまだ放置されたままだった。林道から眺めるエビス尾根上部は純白に輝き、エビス大黒の頭まで一気にせり上がり登高欲をそそるが、技術的には容易そうに見えた。高桑氏と「なんか簡単そうだね」と言葉を交わしながら歩を進める。金山沢出合にスキーをデボ、赤谷川の徒渉は飛



赤谷川林道をスキーで行く

び移ることができて足を濡らさずに済んだ。ワカンに履き代え、尾根の末端から登る。膝下程度のラッセルであるが、我々のいつもの食事と違って豪華な食糧と酒がたくさん入った重荷と急登で一汗かいてしまう。1031夜ピークの少し先の鞍部に幕営する。時間があるので上部の偵察に行く。幕営地上の急斜面をラッセルすると、やがて尾根は左に曲がり傾斜も緩む。幕営適地で右手は美しいブナ林の斜面が続いている。この斜面はスキーに快適そうだが下部末端は切れているはずだ。降雪が強くなり視界もきかなくなつたので、1時間近くラッセルした地点からテントに戻る。夜は高桑氏特製のキリタンボ鍋に舌鼓を打つ。高桑氏は秋田出身なので本場仕込みのキリタンボ鍋だ。以前、菊地の奥さんが作ってくれたキリタンボ鍋を思い出していた。高桑氏との山行では、いつも彼に食当をやらせてしまつて申し訳無く思っているのだが、フリーズドライでの山行を続けてきた私には、なにも出来ないというのが正直の話である。

30日、雪のち晴。4時起床の予定が寝坊をしてしまい6時30分起床、8時40分に出発する。昨夜はだいぶ降雪があり、昨日のトレールは完全に消えてしまい膝上までのラッセルを続ける。昨日の引き返し点を過ぎると徐々に傾斜が強くなってくる。樹林がなくなるころ、この尾根は左から来ている尾根の側面に消えてなくなってしまう。ここは無木立の急斜面でラッセルも深く、雪崩の危険を感じたので一人ひとり離れて登った。ここで一応雪崩ビーコンの動作を確かめる。私は持っているだけまだ使い方を良く知らない。尾根上に這い上ると視界が開け、これから目指すエビス大黒の頭を初め、仙

ノ倉山、万太郎山、小出俣山などがガスの合間に見え隠れしている。緩く左にカーブする広い尾根に行く。傾斜が増すにつれラッセルも胸までと深くなるが、場所によって新雪の下はアイスバーンのためワカンでは足場が定まらずアイゼンに履き代える。ここを登り切ると、金山沢から上がつてきている急峻な尾根とのジャンクションで、ピークというにはあまりにも小さい3本位の尾根上の突起にでる。ここから尾根は面白そうな形状を呈し、ガスもあいまって右側（エビス大黒沢側）に張り出す雪庇の大きさがわからない。すると突然視界が消えた。新雪に隠された穴に転落してしまったのだ。一瞬雪庇踏み抜きか“しまった”と思ったが運良く2本位の所に引っ掛かり止まった。この辺りは所謂ヒドンクレバス状の穴がたくさんあり、その底は落ちたら2度と出られないんではないかと思うほど暗くて深く緊張させられた。ラッセルも身を没する深さで、先程外したばかりのワカンをまた着けるハメになる。雪庇に注意しながら細いスノーリッジを辿り、頂上直下の雪壁を登り切ったとき、先を登っていた高桑氏と香内氏が立ち止まった。どうぞ先に行って下さいと言う。思いがけないお二人の心使いに感謝しながら最後の10mをラッセルし頂上に立つ。ガッチリ完登の握手を交わす。当初の仙ノ倉山まで行く予定は今朝の寝坊がたたって時間切れ。国境稜線は風があり寒いので少し下った所で行動食を取る。ヒドンクレバスの付近は念のためアンザイレンして下る。ガスも晴れ、視界の良くなった上越国境の山々を眺めながらのんびりと下った。途中ダイヤモンドダストが太陽に向かっ



エビス大黒の頭にて…高桑氏と香内氏

て柱状に輝く（サンビラーというらしい）現象が見られた。今夜もなんとか鍋（忘れた）を御馳走になるが、食事が進むので、俺は下山したら太っているのではと心配するほどだった。持ち上げた酒はほぼ空になった。それで就寝となる。

31日、晴。高桑氏ワカン、香内氏つぼ足、私アイゼンという3人3様の恰好で出発。往路を忠実に辿りスキーデボ地に着く。そこから雪の増えた林道を川古温泉に戻った。

1月29日

川古温泉(8:41)－林道終点(11:30)－1031mピークの先(13:46)

1月30日

テント(8:42)－尾根上(11:21)－エビス大黒の頭(13:49)－テント(16:30)

1月31日

テント(9:38)－林道終点(10:16~10:29)－川古温泉(13:04)

エビス尾根（仮称）は、群馬県側から仙ノ倉山への積雪期のルートとしてもっと登られても良い尾根だと思う。赤谷川林道はスキー利用が速くて楽である。ただし、雪解け時期は赤谷川の徒渉が困難になるであろう。幕営地は今回の場所以外に、1250㍍付近と1600㍍付近の尾根上に求められる。

(本図 記)

C級指導員・講習会 安達太良山

1999. 2. 6~7
パーティ 笹平孝

今回の講習会は安達太良山で行なった。一般講習者と指導員講習者が同時に黒金小屋に向かうこととなる。天気が悪く風が強い為樹林帯を過ぎると目も開けられない程度ゴーグルがほしくなる。

先行に行くが一般講習の人達なのでなかなか進まなくなり、立ち止まることが多くなる。余りにも進まないで指導員受講者が先頭になって何とか動くようになる。

山小屋に着くとまず、一人ずつに別れてビバーク体制を取る。殆どの人が雪を掘り出しその中にあってツエルトをかぶるが、みんなと同じではと思い斜面の所に横穴を掘ってみた。それが終わるとワカンやアイゼンの雪上

歩行をやった。それから小屋に入りペーパーテストをする。分からぬ問題が多くあった。今日の講習会が終わると、早速風呂に入る。すでに風呂に入っているおじさんがいて話してみると地元の人で人の多さに驚いた。

翌朝は、一人ずつ滑落停止の試験をした。上手くできない人は出来るまで何回もやらされていた。それが終わると各班に分かれてスタンディングアックスピラーで確保したりした。あくまでも講習会なので試験的な事は少ない感じがする。昼頃には一通り終わり、下り始めた。

(笹平 記)



宮之浦岳と開聞岳

1999. 2. 11～15

パーティ 古山正文

2月10日頃になって、1月の14、15日の代休をとってくださいと、強く事務の人に言われたので、そこで急遽12、15日を休みにして、5連休として、遠くの山一宮之浦岳に行くことにした。そうと決まれば飛行機の手配のため旅行代理店に直行、しかし出発直前、しかも飛び石連休前だけに一番便利な鹿児島乗り継ぎの屋久島行きは取れなかった。羽田一鹿児島がだめらしい。鹿児島⇒屋久島を押さえてもらって、鹿児島に行く方法を考え、結局福岡経由で鹿児島までの航空券が取れた。帰りは日程的に余裕がありそうなので船で帰ることも考え、屋久島⇒鹿児島は現地で考えることにして、鹿児島⇒羽田だけを予約したが、月曜日だったので簡単に取れた。

2/11。11時過ぎ、まずは最新のボーイング777（各座席テレビ付き）で福岡。そこからボーイング737で鹿児島。再び乗り換え、初めて乗る国産プロペラ機YS-11で強風の中、場合によっては引き返すとの条件で離陸、窓から見える海は白波が立っていた。「やめて引き返えしても文句は言いません」と言うぐらい機体を揺らす風の中を強引に？無事着陸。空港で登山届を出し、すぐにタクシーに乗り、安房の集落で買い出しして、屋久杉ランドを通り、林道を工事中で通行止めのと

ころまで入った（約6000円）。緯度が低いだけに、夕方6時過ぎなのにだいぶ明るい。少し歩いて、雪が完全に林道を塞いでしまったところでツェルトを張りビバークした。

2/12。プラブーツを履いて、出発。すぐに紀元杉が右手に現れた。更に行くと林道終点。ここから雪がだいぶついた登山道になった。途中で、宮之浦岳に向かう尾野間歩道に合流、あられ交じりの雪となった中、淀川小屋に着いた。小屋から淀川に掛かる橋を渡り、歩道を行く。下花之河、花之河の湿原は雪で覆われていて、所々木道が見えていた。黒味岳分岐で先行のパーティが見えた。黒味岳の東の山腹を巻き、凍りついた沢を越えて今度は別の山の西側山腹を巻き気味に登る。ここまでに3パーティ（位？10名）ほどを追い抜き、最後のパーティを追い抜いたらトレールがなくなり、先頭になった。周囲は、樹林がなくなり笹藪となった。笹原の中のU字状に作られた登山道は、雪が吹きだましたモナカ状で、それを踏み抜くと足を抜くのに苦労した。一人黙々とモナカ雪を踏み抜きながらラッセル？して、粟尾岳を過ぎたコルの大きな岩陰で吹雪をよけ休息。ここから山頂はあっという間だった。山頂に着いたが、吹雪の為エビの尻尾が発達するような天候の為、視界ゼロ。それど



宮之浦岳山頂

ころか、目も開けていられない。そこへ、後続の登山者1人が登ってきたので、こんな天気の中だけれども、写真をお互い撮ってもらった。その人は高塚小屋まで下るらしい。私も縄文杉のある高塚小屋へ行く予定だが、今日は時間のかからないはずの永田岳を経て鹿之沢小屋へ向かった。しかし、途中で疲れてしまい、永田岳への登り返しとなる鞍部（宮之浦川源流部か？）で岩陰にツェルトを張ってビバーク。

2/13。ガスと強風は止まないが、雪は止んだ。とりあえず永田岳まで登ってエビの尻尾の発達した永田岳の山頂を示す杭で写真を撮り、昨日きた道を戻った。屋久島の中心部の一番高い辺りにいるのに、昨日も今日もまったく海は見えない。宮之浦岳への登り返しの分岐から、高塚小屋に向かう。横林帯に入る辺りで、なんとスキーを背負った登山者しかも2人に会った。チャンスがあれば滑るのだと言う。高塚小屋から10分程下ると、縄文杉（樹齢7200年）に着いた。縄文杉は急斜面に生えていた。今では少し離れたところに展望台が作られていて、近づかないようになっていた。この展望台には今日下から登ってきたハイカーと写真家の人たちがいた。更に下ると大王杉（縄文杉が発見されるまでは一番古いとされていた杉、樹齢6000年だったかな？）、夫婦杉、ウィルソン株（1604年頃に初めて切り出された杉の切り株で1800何年かにウィルソンによって発見されたらしい）、翁杉等々の杉が次々に現れた。

小杉谷のトロッコ軌道に出た。この頃になると天気も回復して青空がのぞき日も射してきた。日の当たる軌道上で、濡れたシュラフや雨具などを広げ乾かしながら、休憩。トロッコ軌道を行くと屋久杉ランドの方に抜けられるが、今回は途中から辻峰に登り返し、そこから白谷雲水峡に下った。白谷小屋に着いて、「がんばれば林道終点まで40分、そこから下りの林道を1.2Km歩けば富之浦に着いて、生ビールとか刺身なんかが食べられるんだがな～」な～んて思案したが、やめた。小屋は数年前まで管理人がいたらしく割と立派だった。誰もこないだらうと板の間にツェルトを張って中で休んでいたら、下からハイカーが2人やってきた。

2/14。林道終点まで下り、林道を下らずに楠川歩道を下った。三本杉を通って、楠川歩道も、終わり頃になってはじめて海が見えた。その先には平らで全く山のない種子島が見えた。海岸線の橘川に出て海辺で写真を撮ってから、宮之浦港に向かった。海岸からは前の山が高く宮之浦岳を望むことはできない。途中で駐在所に寄って下山届を出した。港に着いて船の時刻表を調べると、高速船が屋久島⇒種子島⇒指宿⇒鹿児島港まで出ている



縄文杉

のが判った。今日中に指宿に渡れば開聞岳にも登ることができる。早速、高速船“ホッピー”的乗船券を買い、あとは出発までお土産やを覗いたり、食事をしたりしてすごした。船に乗って屋久島を離れるとうとう白く雪を戴いた宮之浦岳が見えた。種子島港で停船時間のしばらくの間上陸。後は指宿へ。錦鍋湾に入る前に開聞岳がきれいに眺めることができた。船内ではちょうど衛星放送で雪の秋田の集中放送をしていたが、この南の海上では本当に別世界のことだった。昼遅く、指宿に着いて駅の案内でeconomy hotel（いわゆる民宿）をとつもらつた。宿は砂蒸し温泉会館のすぐそばで、早速温泉に向かった。浴衣に着替えて（浴衣は入浴料金の中にはいっている）、海岸の砂を掘ったところに寝てからおばちゃんに砂をかけてもらう、文字どおりの砂蒸し。10分ほどで汗だらけになって這い出た（好きなだけ蒸されていてよい）。あとは館内のお湯につかる。後で判つたが近くの砂浜を掘ればいたるところで、砂蒸しができるらしい。

2/15。朝二番の列車で指宿から隣の山川駅に向かい、そこで開聞駅までバスで移動。そこから30分位で、

2合目登山口に着いた。いらないものをデボして、登り始めた。登山口から山頂まではちょうど、時計回りにぐるっと一周する事になる珍しい登山道だった。山頂はちょっとした岩がありそこが頂上らしいが、ほんの2、3メートルぐらい高いだけ、その上に立つと辺りはかなり広い樹海を形成していた。枕崎に至る海岸線や恐竜イッシャーのいるらしい池田湖がよく見えた。下山途中50人を超える集団とすれ違った。平日にもかかわらず、こんなに登ってくるのはよほど人気のある山なのだろう。登山口で着替えて、町に下りていった。途中開聞中学校の前で、『こんにちは、山はどうでしたか？』

と中学生に声をかけられた。彼らにとってはいつも見上げている、開聞岳は自分たちの自慢の山なのだろう。開聞神社で時間をつぶして、午後遅くの列車で鹿児島駅に向かった。そこから高速バスで空港に行き、羽田まで戻った。羽田空港では飛行機は空港ターミナルに行かず、駐機場について、そこから連絡バスでの移動だった。モノレール、山手線を乗り継ぎ、ぎりぎりでつくば行きの高速バスに乗れた。

(古山 記)

冬山レスキュー講習会に参加して

1999. 2. 27～28

パーティ 本図一統、古山正文、笹平孝、木村一

私達のフィールドは自然の中である。11月～5月の6ヶ月間は白銀の中での活動になるが雪崩が一番恐い存在である。最近は雪山をフィールドに活動する登山者・エクストリームスキーヤー・エクストリームボーダー等にビーコン&スコップ&ゾンデ棒の携帯が急速に普及しつつある。遅ればせながら我々の山岳会でもビーコン&スコップ&ゾンデ棒を個人装備として購入し雪山への携帯を義務化したが、ビーコンの操作には訓練が必要なので、東京都山岳連盟遭難対策委員会主催の“冬山レスキュー・リーダー養成講習会”に参加する事にした。2/23に国立オリンピック記念青少年総合センターでの机上講習後、場所を谷川岳西黒尾根末端に移して2/27～2/28の2日間実技講習を受講した。

1日目は、雪崩のメカニズム・弱層テストの方法・ビーコン操作方法についての実技講習のカラキュラム。特にビーコン操作方法については発信状態のビーコンを雪の中に埋没させて、それをタイムを測定しながら1人々順番に搜索の実技講習を受講した。更に宿舎に帰ってからは低体温症について・雪崩のメカニズム・雪質の変化・雪崩の種類等についての学課講習を受講した。その後2日目に実技講習予定のツエルトを使用した雪上搬送方法についての実技指導を受けた後、懇親会に移り夜が更けるのも忘れて親睦を深めあった。

2日目、前日に引き続きビーコン&ゾンデ棒を使用しての搜索実技講習では、講習生はピンポイントでの搜索に習熟していないので発見するまでに時間を要した。しかしビーコンの威力には目を見張るものがあり、特にデジタルビーコンは埋没者の近くに短時間で到達する事が出来るのには驚きであった。更に都岳連のスタッフが雪の下に埋まり、講習生がビーコンを使用して埋没者を搜索し救助するまでの実技講習では、遭難者の体温低下を

防止する目的で埋没者の上部の雪を残したままツエルトで覆い、その後雪を取り除く方法は新鮮に感じられた。最後に、講習生全員が救助隊という設定で、都岳連のスタッフが雪崩埋没者になりビーコンを使用して埋没者の搜索、救出、ツエルトでの雪上搬送（ルート工作・ザイルで確保しての急斜面の下降）についてのシュミレーションを実施した。シュミレーションとはいっても実戦ながらでの救出訓練でしたが、講習生の中でもザイルワーグの習熟度&講習内容の理解度の差もあり、実戦には程遠い救出劇になってしまった。

今回の講習会に参加して感じた事は、雪山をフィールドとして活動する者の常識としてビーコン&スコップ&ゾンデ棒は必需品であり、その使用方法は毎年訓練して習熟度を高めておく必要があると痛感した。まだビーコンの価格は高く、普及度も低いのが実態であるが、雪山をフィールドとして活動する者にとってセルフレスキューリーは自己責任であり、又同行者・パートナーへの義務としてビーコン・スコップ・ゾンデ棒の携帯について認識を深めて欲しいと思う。

(木村 記)

はじめちゃんの想い出日記(Part 8)

北穂岳滝谷第三尾根

これから下降する滝谷C沢左俣を覗き込むと、下から烈風が吹き上がり下降を躊躇してしまいそうだ。上部は傾斜もかなり急なので最初の5mは後向きで下降したが、直ぐに前向きなり下降を続けた。もし、ここでスリップしたらまず助からないんだろうと思いつながら嚴冬期の滝谷C沢を下降していった。5月からのヒマラヤ遠征を控え今年の冬山合宿は穂高岳滝谷に決定した。奥穂高岳パーティを含めると総勢10人以上の大所帯になり、潤沢西尾根を登っている最中から脇やかな合宿になってしまった。その中心的人物はACC-J茨城の事務局を努めているK氏である。が、その当時からユニークな存在であった。潤沢岳西尾根の森林限界付近で幕営した後、翌日蒲田富士の近くに全員が入れる雪洞を掘り、ここをベースキャンプとして冬山合宿がスタートした。

翌、12/31は更に潤沢岳西尾根を登り、穂高岳山荘の前で奥穂パーティと再会を約して別れ、潤沢岳を北穂岳に向かい下降を開始したがかなりの急斜面である。ハシゴを下り、左に回り込む付近が悪く感じられザイルが欲しいが、リーダーの『こんな所でザイルなんかいるよ、じゃ滝谷なんか登れね～よ』の一言でザイル使用は見送られノーザイルで北穂岳まで縦走して、北穂頂上直下で雪洞を掘り明日の登攀の成功を夢見てビバーク。

翌、1/1冒頭のC沢左俣の下降になったがC沢を合流点まで下降し、右俣を少し登って第三尾根に取り付いた。最初は雪の積もったガリーの易しい登攀。そこを難なく登ると垂壁が出てきたがここで壮絶なトップ争いの末、金沢氏が嫌々トップでここを乗越す。上部でトップを交代してT3に這い上がりアイスハーケンを打ち込んで後続を確保、この頃よりまわりを見る余裕も出てきたので下方に目を転するとC沢の雪の斜面がはるか下まで続き、左手には第4屋根を登攀中の1パーティの姿が望まれ、厳冬期の滝谷にしては穂やかな登攀日和である。更に2ピッチは登ると登攀終了点になりここで全員がガッチャリ握手。天候が下り気味なのでこのままベースキャンプの雪洞まで下降する事にして、登攀用具をザックにしまい潤沢岳に向けて歩を進めた。昨日は悪く感じられた縦走路も滝谷登攀後は何て事なく通過。潤沢岳の登りにさしかかる頃には疲れも出てきたが、ここを登れば悪場は無いので、気合いを入れて頑張り潤沢岳の稜線に立った。ここから見上げる奥穂岳の頂は濃いガスに包まれ天候悪化の兆しが直前まで迫っているのが感じられた。ベースの雪洞に帰着すると奥穂パーティが暖かい飲物で出迎えてくれ、その晩は夜遅くまで祝杯を重ねた。

翌日は朝から雪が舞っており降雪の中ベースキャンプを撤収して、潤沢岳の西尾根を下降し新穂高温泉で汗を流し冬合宿は無事に終了した。

翌年、冬合宿で再度滝谷のクラック尾根を目指して同ルートで入山したが、前日の猛吹雪の為に滝谷の岩壁にはエビの尻尾が張り付き、岩壁の中でのビバークを余儀なくされそうな事と、日数不足の為に敢えなく敗退。私の冬の滝谷はこうして幕を閉じた。

1975年12月29日～1976年1月2日
(名雪博二・木村一・金沢清・吉井清二)

(木村記)

栗駒山山スキー

1999. 3. 20

パーティ 水島幸夫、名雪博二、松原丈男、吉田信一（ACC-J東京メンバー）
中島淳、木村一、笹平孝、菊地光夫（ACC-J茨城メンバー）

季節も3月になり、冬から少しずつ春が近づいて来て、待望の春山スキーのシーズンの到来である。今回は、茨城より木村、中島、笹平の4名の他にACC-J東京のメンバーも来るという事なので楽しみであった。

待ち合わせの場所は、現地の“栗駒いこいの村”である。茨城からも東京からも遠く、300Km以上はあり、特に仙台までが大変遠くに感じた。

茨城パーティは現着が2時頃で、東京パーティはそれに遅れること約30分後に到着した。東京パーティのメンバーは、水島元会長と名雪、松原、吉田さんの4人パーティである。前夜の天気予報では、午後より天気が悪くなる事が予測されたので、明日は早朝出発を確認し、酒を一杯したのち速やかに就寝した。

翌朝、昨夜の現着が遅かったので、6時出発となった（飲み過ぎた訳じゃない…と思う）。仲間が8人もいると遠い昔、たくさんの仲間達と登山した事が思い出され、登っていても張り合いがあり楽しい。8人もいるといつの間にか先行パーティと後続パーティと何となく別れた。いつもなら元気な木村氏も4～5日前に家の片づけ物をしていてギックリ腰をやってしまい、病院に通院していた状態なので今回の登山はかなり苦しそうである。それにひきかえ水島氏は元気でスイスイ登ってくる。とても七十歳になる御高齢には見えない。体力、気力、知力、全てに置いてACC-Jの仲間達の追い求める姿である。仲間達の思いはそれであろうが、素晴らしい元会長である。ところで水島さんて？、本当は六十？才だよね？。

最初の登り始めの所は樹林帯の中を行くが、少し行くとイワカガミ平に着いた。4月になればここまで車で入れるとガイド案内があり、そこより目印には乏しい単調な大斜面があり、シールを利かせて高度をかせいで行く。しばらくすると1407mの独標点に着いた。この辺からやや山に向かって左へトラバースしてコースを変え、急な栗駒山への登りとなる。時間は9時半頃であったが、天気はさっきまで晴れていた空も雲も出てきて変化が見られる。風も上に登る程、強くなる。先行パーティは山頂で後続パーティを待つ。山頂は風が強く、アイスバーンのカリカリ状態であった。後続がようやく登頂し合流した。早速、下る準備。木村、菊地が遅れる事5分。板をはいて滑降していく。視界も悪く、下る方向、トレースも不明瞭で菊地（私）

は、右側の懸崖に沿って下るが、

『余り崖の方へ行くな』

と木村氏の声に、左側に進路を変更して下る。下っているうちにどうもトレースが無くなり迷っている事がつく。1時間2人で雪の上をこね回して磁石と地図をみて進路を大きく右側に取るとトレースが有り、元のコースに出た。仲間達に遅れる事1時間半でイワカガミ平に着く。仲間もだいぶ心配した様で、気の早い人は「遭難対策隊を組むか？」と言っていたそうだ。

イワカガミ平からの下りは緩い斜面で栗駒いこいの村に到着したのは、12時30分頃であった。

その後、温泉に入り東京パーティは連休なのでここより秋田県の雄勝の湯につかりに行くとの事でここで別れた。

連休後に知った事であるが、木村、菊地で迷ってやっとコースに出た時一人で山頂を目指す人がいたが、天候が悪く視界も無くビバークとなり、携帯電話で救助を呼びヘリコプターで救助されたようだった。

（菊地 記）



荒沢尾根（敗退）

1999. 3. 20～22

パーティ L 本図一統、古山正文

荒沢尾根を登るべく大谷原入り口に到着したの19日夜半であった。出発が早いので早々に就寝とする。

20日。朝飯を食べていると車の前を3人組が通り過ぎていく。その中に見たことのある人がいた。

『お~い白石さんじゃね～のよ。どこ行くのよ』と声をかけると、いつもの調子で

『東尾根』

『あっそう、今日は何処までよ』

『第一岩峰あたりまで』

『ほう頑張るじゃね～のよ』

『本図さんはどこ』

『荒沢尾根』

手を立てながら『こんな壁登んでしょ』

『そんな壁登るわけあんめよ。俺も歳だからよ』

『本図さんのことだから壁登んだと思ってよ』

『もうだめよ。それよりこの天気では行くかどうすか迷ってるところ。じゃ気をつけてね』

『本図さんも』と言って出発していった。水戸山の会の白石さんだった。

さて俺達も出発しようと腰を上げた頃からチラチラと雪が舞出した。何年か前の教訓を生かして今回は下流の橋を左岸に渡る。壁に取り付くには遅すぎる時間だが、トレールがあるので進むのには楽でよい（もっとも我々は壁ではないのかいまわないので？）。やがて取水口の橋を渡る。たしかここは橋を渡らず右岸の壁下をトラバースするんじゃないんだっけ。と見てみるとトレールはついてない。素直にトレールに従う。するとトレールは水流に消えているのではないか。対岸には2パーティがスバツを直している。徒渉したらしい。なんだやっぱり先つきの所は右岸だよ。と戻ってみたが右岸は水流になっていて、確かにルートにはならなかった。どうやら地形が少し変わったようだ。こうなったら意を決して流れに入らなくては。靴を脱いで膝までの徒渉だが冷たいのなんのって身が引き締まった。

天狗尾根へのトレールと別れ、ラッセルになるもあまり深くはない。荒沢は左右両岸の壁からの雪崩で埋まっているが、ひっかかるブロックがいつ落ちてくるか心配である。この頃より降りが激しくなり、荒沢尾根を正面に見るころには（二俣手前）新雪が10センチとなってきた。もう危ない。新雪雪崩がきても不思議でない状態だ。下ることに決定する。決めたら下りは早いこと早いこと逃げるように降りてしまった。

帰りの徒渉は激しい降雪の中だったせいか、凍傷にな

るのではないかと心配するくらい辛かった。

車に戻り町まで酒を買い出しに行きビールをたらふく飲む。でもいつでもそうだが敗退後のビールの味はイマイチである。なんか苦く感じるのは私だけだろうか。

21日。こんなこともあるうかと転戦ルートとして戸隠西岳P5稜の資料も持ってきたが、今日も冬型の予報なので諦めて帰ることに決める。

後日、メーリングリストで分かったことだが、20日の夜の荒沢は雪崩のオンパレードで、どでかいのが2発出たそうである。降りて良かった良かった。

(本図 記)



氷ノ山一山スキー

1999. 3. 27～28

パーティ L高田賜年、嫁本、濱野（OB、宇部山岳会）、古山正文

29日の月曜日には広島に行く用があったので、その前の27、28日の土・日に宇部の高田さんに山行予定があれば混ぜてもらうつもりで電話をしたら、氷ノ山の山スキーに3人で行く予定だというので、その話に乗った。

26日の夕方の東京駅は年度末の為か？混雑していた。姫路駅で落ち合う予定なので、そこまで座っていきたい。3本ほど“ひかり”をやり過ごし、並んで待って座ることができた。10時過ぎに姫路駅に着いたが待合室はなく、更にはベンチすらなく困った。駅の隅でマットをして休んでいたら、1時半過ぎには駅を閉めるために外に追い出された。外は雨が降っていた。駅の軒下にマットを敷いて、寒さしのぎにシュラフにもぐって高田さん等の到着を待った。3時頃に新しく乗り換えた高田さんのエスティマが現れ、ようやく合流できた。雨の中を氷ノ山の麓のスキー場鉢伏口（奈良尾）を目指し、スキー場集落のはずれで、車を止め仮眠をとった。明るくなつてから回りを見ると、リフトは谷をわたるように対岸に伸びているのだがそのリフトの下は、段々田んぼだった。この辺りには雪はほとんどないので、車で更に上のロッジまで上がることにした。その途中、落石を避けきれず

（いや、むしろ避けなかった：運転手・高田さん）タイヤが石に擦れてパンク。車のマニュアルを読みながらタイヤを取り出し、交換した。終点のロッジは真冬ではゲレンデの中腹辺りにあるのだろう。そこから見える斜面には雪が残っていた。雨は降り止まず、車の中で様子を見る。と言うより、今日はどこで時間を潰そうかという雰囲気になっていた。1台の車がロッジのそばに止まり、中から4人の登山者が降り、支度をして出発していった。この雨では下着まで濡れるだろなどと考え、ぼんやりと眺めていると、神戸ナンバーの車がやってきた。今度は我々と同じく山スキーの様だ。彼等は雨の事など全く気に留める様子もなく、出発の準備を始めた。それにつられるように、我々も渋々ではあるが準備を始め、神戸パーティ4人を追うように出発した。リフト2本分のゲレンデを登つてから、尾根にとり付いた。途中1回休憩を取り、神戸パーティを追い抜き、傾斜の緩んだ広い斜面を登り切ると頂上小屋に着いた。小屋の中でお茶を沸かして昼食を取っていると、神戸パーティもやってきた。そのリーダーのおじさんは、ここはよく知っているらしく、下りの東尾根の様子について詳しく説明してくれた。彼等も同じルートを滑るらしい。我々が先に小屋を出て下り始めるが、ガスがかかっていて目標物のない

広い斜面では、小刻みにピッチを切ってルートを探さなければならなかった。そうしている内に、神戸パーティのおじさんが滑り降りてきて、ルートはもっと右だよと声を掛けてくれた。そこで一緒に下っていくことを頼むと、快く応じてくれた。我々のパーティは全員まあそこそこ滑れる。神戸パーティは一人山スキーに慣れてない人がいた。おじさんを先頭に我々のパーティが続いて下り、神戸パーティの他の3人がゆっくりと下ってくるのを下で待つ、という形になってしまった。我々はルートの心配をすることなくおじさんについて行くだけなので、快適な滑りを楽しむ事が出来た。宇部の濱野くんはスノーボードで今回参加であるが、斜面で静止して立っているのがどうも楽ではないらしく、みんなを待つ間雪面に座り込まなければならなかった。一箇所急斜面を下り、しばらく滑ると藪になつて一旦スキー滑降終了。左手の藪を少し登り、東尾根の登山道に出た。ここで神戸パーティと別れ先に下る。スキー場の登ったのとは別の斜面に出たところで、再びスキーで下り、ロッジまで滑った。スキーを片付けて、移動の支度をしていると神戸パーティも下ってきた。今日の御礼を言って別れた。我々は明日、西面の尾根を滑るために戸倉に移動。途中、スーパーマーケットで食事とお酒の買い出し。夕方、林道除雪終点でテントを張り宴会に突入。宇部山岳会の面白い山行の話などを聞きながら楽しい宴会となった。翌日は長い林道をシールを付けて出発。ボーダーの濱野君は一人つぶ足。林道が狭まった辺りの登山道入り口の標識から、赤布を頼りに急斜面を登ると、大きな木がまばらに生える緩やかなブナ林の広い尾根になった。所々にスキーツアー用の大きな標識の番号円板が所々にあった。樹林帯を抜け、二ノ丸への登りにさしかかった頃に天候が悪くなってきて、吹雪となつた。視界の利かない、目標物のない大斜面は動けない。しばらく考えた末、ここから戻ることにした。コースガイドによると、このブナ林がコースの最も楽しい所らしい所なので、そこを滑られればまずはOKか。快適に林の中を滑り、尾根末端の林道までの急なルンゼはツボ足で下りた。緩やかな林道はなかなか滑らず苦労した。スノーボードは完全に滑らず、徒步での下りとなつた。帰りは途中温泉により、コンビニでスキーを宅配便で家に送り、山陽高速道路で広島まで乗せてもらった。

高田さん、次は大分、宮崎の沢をよろしくお願ひします。

（古山 記）

逆・深夜鈍行（後編）

アフガン・パキスタン国境～ペシャワール～
ラワルピンディ～ラホール～デリー



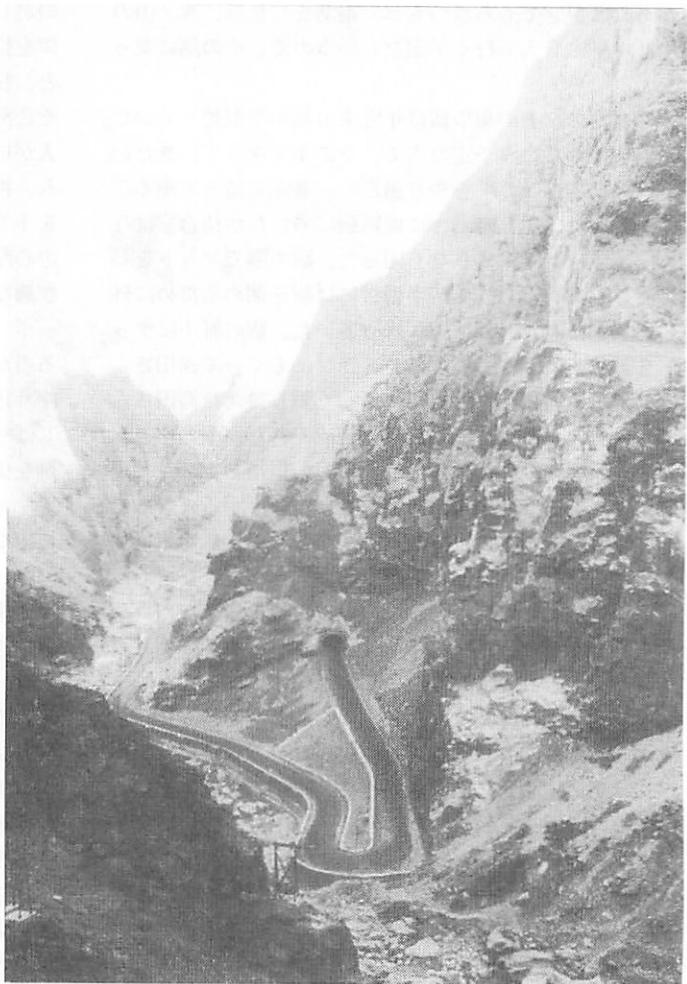
パーティ 中野融、嶋村幸男、本図一統

今回後編として日本までを書くつもりでしたが、生まれ持つての筆無精が災いし日本には辿り着けませんでした。やはり日本は遠かったです。後編はデリーまでとさせていただきました。その後は続編で書きます。

なにとぞお許し下さい。

今まで何ヵ月も右側通行をしてきた私達でも、左側通行に馴れるのに時間はいらなかった。でも左ハンドルなので追い越しには大変気を使う。これからはナビゲーターの役目も今までより重要になってきた。中野は運転免許状を持っていないのでナビゲーターに徹しているが、文句も言わず本当によくやってくれる。私と嶋村は交代で運転できるが、ナビゲーターは休みなしで大変だろう。

カイバルパスへは砂利道でつづら折れの連続した登りだったが、想像していたより厳しくなかった。ドロミテの峠の方がよっぽど厳しかったように感じた。カイバルバス周辺にも集落があり、商店も並んでいる。いわゆるちょっとしたバザールである。銃砲店もあり、見るからに旧式の銃が並んでおり、いくらでも買うことができる。この後に起こったソ連のアフガン侵攻には最後まで抵抗したアフガンゲリラの根拠地でもあるのだ。それらを見学するためにスピードを落とすが、しかし止めることはしない。さらに注意することは住民と目を合わせないようにした。恐ろしい所というイメージが頭にインプットされているので非常に緊張する。それでも相手の方は“こいつら何処から来たのか”というような顔をしてのぞき込んでくるのだ。鉄砲を持ち歩いている人が多くやはり不気味であった。もちろん電気などはなく（ローンクだったかな？）、薄暗い集落をぬけ一路ペシャワールを目指す。無事通過してしまえば、あまりの呆気なさにちょっと物足りなさを感じた。少しくらい何事が起ってくれた方が面白くて良かったのに、なんて思うのだがそれは過ぎてしまったから言えることだ。既にインドのビザは取得している



カイバル峠の道

ので、あまり興味のないパキスタンは一気に走り抜ける予定なのだ。（この時はパキスタンに興味がなかったが、6年後再びパキスタンを訪れるんだろうとは夢にも思っていなかった。）

やがて明るくてかなり大きい町に入った。特別明るいということではなくて、電気のない所から電気のある所に来ただけなのだが。この町がペシャワールである。夜のせいかあまり暑さは感じない。我々の車には当然のことだがエアコンなどという文明の利器はついていないので窓は開け放しである。パキスタンでの最も一般的な交通手段は輪タクであり、たくさん走っているのには驚いた。その輪タクのお

にいさんに聞いた。

『ラワルピンディはどうかな』

『なに、ピンディか』

『ラワルピンディだよ』

『ピンディだろ、それならこっちだよ』

現地の人はラワルピンディとは言わずピンディと言う。このピンディという書きが非常に心地よく、私もそれからはその呼び名を使った。

『何処まで行くんだね』

『インドまでだよ』

『なに、インドだと、なんであんな貧乏で汚い所へなんか行くんだ。パキスタンは最高の国なんだ。インドなんか行くんじゃねえ』だと。

この一言でパキスタンとインドが犬猿の仲だということがはっきり分かる。パキスタンを通過する僅か1日半でこの言葉を何回も聞くことになる。

レストランで飯を食うことにした。レストランといつても名前だけだが、アフガンのシシカブラーに飽き飽きしていた私にはカリーというメニューはとても嬉しかった。でも味は日本のカレーには程遠く、例えばマトンカリーであれば、マトンの骨付き肉を塩とカレー粉の入った水で煮ただけといったものである。中野は辛い辛いを連発していたが私には辛いとは思わなかった。そして旨いとも思わなかった。

もの珍しくて人は集まってくるものの悪さをする奴はいなく、思っていたよりも危険は少ないと判断し、金もないことなので今晚は行ける所まで行って野宿することにした。

インダス川の近くまで来た所に、夜なのではっきり分からぬが、牧草地なのか道路の右側に草地があったので路肩に駐車してピパークすることにした。シートを敷きシュラフカバーに入つて間もなく、ドカーンという大きな音に飛び起きた。すぐに交通事故だということは分かった。トラックと乗用車が接触したらしい。トラックには大勢の人が乗っていたらしく、方や乗用車は子供づれの男性だ。言葉がわからないので何を言い争っているのか不明だが多勢に無勢、乗用車は不利だ。すると乗用車の男は突然ピストルらしき物を持ち出したのである。これを見た我々はビックリし、

『シマちゃんヤバイよ、あの車が接触したのは俺達の車が駐車していたせいだ、なんてトバッタリ受けたらたまんねえな』

『トオルちゃんどうする』

『トンズラしようか』

『うん、そうするべ』

我々はそろそろ荷物をまとめ、ライトを消したまま急発進、三十六計逃げるに如かず、とばかり一目散に逃げ出したのであった。

1時間も走ったであろうか、もうここまで追っかけては来ないだろうから寝ましょうやと、平な所を見つけてシートを敷き始めたら今度は数匹の犬が吠えかかってきた。いまにも食いつきそうな見幕である。シーシーあっちへ行け、と追っ払っていたら、間もなくこん棒を持った10数人の男が飛び出して来て閉まれてしまった。言葉が通じないのですべてジェスチャーである。

『おまえらここで何してるんだ』

『私達泥棒ではない。お金ないのでホテルに泊まれない。だからここで寝たいんだ』

『ここは危険だからやめたほうがよい』

『でも私達はたいへん睡い』

『おまえら何処から来たのか』

『ジャパンです』

『なに、ジャパンだと』

一人の男は日本を知っているらしく、びっくりした顔をして他の男に日本の位置などを教えていたようだった。男達はなにやら相談していたが、こっちへ来いと手招きをしている。いつものようになるようになるべと付いて行くこととした。集落に入ると男達は何軒かの家に入り込みベットを2つ持ち出してきた。

『今、余計なベットは2つしかないがこれで寝なさい』『えー本当ですか、ありがとう、サンキュウ、ダンケシェーン、メルシー、スパシーボ、シェシェ、・・・』知っている言葉をすべて並べた。さてしかしだ、2つのベットに3人ではどのように寝ればよいかだ。パキスタンのベットは木製の枠に麻みたいな物で編んである、つまりハンモック状になっており、真ん中がへこんでいるのだ。1人で寝るのには涼しくてよいが、2人で寝ようするとどうしても重なってしまう。幸か不幸か私には男同士で重なって寝る趣味はない。ベットを2つ並べ私は木の枠の上に寝た。けして寝心地は良くなかったが、星空を見ながらパキスタン人の優しさに触れ気持ち良い一夜を過ごせた。

夜が明けると同時に村中の人が集まってきた。このような電気のない村では、暗くなると寝て、明るくなると起き出す。太陽と一緒に、これが普通の生活なのだ。珍しい人種がいるという話が村に広がったのだろう。集まってきた子供達の顔を見ると宇宙人でも見ているような顔をしている。その後ろに大人達が遠巻きにしている。一人のご婦人がチャイを持ってきて、これを飲んでから出発しなさいという。そのチャイは砂糖がたくさん入っていて、美味しかったこと美味しいこと、今までの私の人生5年間、後にも先にもこれほど旨かったチャイはない。（6年後再びパキスタンを訪れて分かったこと

だが、パキスタンでは砂糖は貴重品であり、現地人は普通チャイには塩を入れて飲んでいる。最高のもてなしをしてくれたのだと思う）

やがて長老がやってきて話しかけてきた。この長老は英語を少し話せた。少しといつても我々の英語より上手だったかも知れない。香港に行ったことがあるとバースポートを見てくれた。この村では学識経験者らしい。日本の事についても興味があるらしくいろいろ聞かれたが、なにせ言葉が十分通じないものだから、どれほど理解してもらえたか疑問である。

さて何かお礼をしたいが、まさか猿岩石のように農作業を手伝うわけにもいくまい。この時とばかり日本から持ってきた穴空き5円硬貨をジャバニーズコインと言いながら子供達に配った。日本を出るとき、外国に穴空きコインはないので、海外では喜ばれるお土産と聞いていたのでたくさん持ってきたが、実際は外国にも穴空きコインは存在した。この村の名前も聞いたはずであるが、資料のない現在、なんという村かわからなくなってしまった。もう少し歳をとって時間に余裕ができたら、この村を探して再訪してみたいものだ。何十人という人々に見送られて出発、見えなくなるまで手を振ってくれた。

世界中人種は違えど皆良い人間が殆どで、悪い奴はほんの一握りだけなのだ。ヨーロッパでもトルコでもイランでも親切な人々が殆どなのである。確かに油断をすると何もかも持っていくしてしまうのも事実だ。人様の物を盗むという行為をする泥棒が悪いという倫理はこれらの国々では通用しない。盗まれる奴が悪いのである。なぜならば彼らは生きるのに一生懸命なのだ。特にアフガンなんか日中でも鉄砲を持ち歩いて人がたくさんいる。それは人を殺すために持ち歩いているのだ。といってもやたらめったに撃つ訳ではなく、相手を殺さないと自分が殺される時に撃つ。他の理由では自分が生きていくために撃つこともある。私だって働きたくても職がなく、腹が減っても食い物がなければパンを盗むだろう。何処の國の人間だってそう変わりはしない。人類みな兄弟とだれかが言ったがその通りだと思う。

ピンディの市街に入る。ピンディはカラチ（訪れたのは6年後だが）と比べると本当に田舎の都市である。建物の造りも走っている車もカラチの方が近代的である。とても同じパキスタンとは思えない位違う。車で移動していると闇ドル屋に声をかけられることもないでの、銀行で少しのドルをパキスタンルピーと交換する。銀行でもパキスタンらしい様子がうかがえた。お札が百枚毎に封緘されているのは日本と同じだが、パキスタンではさらに糸でお札の中心部分が縫い付けてあるのだ。それはお札が抜き取られないようにである。

パキスタンでは行員も信用されていないのだろうか。だからパキスタンのお札は穴だらけなのだ（新札はどうか知らない）。

人と輪タクが多くてノロノロ運転をしていると、日本人らしき人が歩いていた。日本人かなと眺めていると、向こうも頻りにこちらを窺っている。迷っているようだったがやがて決心したように走り寄ってきた。

『あの～日本人ですか』

『はい、そうです』

『あ～よかった、実は私は日本人と一ヵ月会っていないんですよ。もう日本語が話したくてウズウズしていましたよ』

堰を切ったように喋りだした。彼は旅人でインドからヨーロッパまで陸路で行くそうだ。鉄道とバス利用の彼と私達のルートはすべて同じではないが、これから先の情報を交換した。ものの5分か10分の会話だったが、彼は欲求不満が解消したみたいへん喜んで別れた。

イスラマバードの日本大使館に手紙がきている可能性もあったが、寄らずにラホールを目指すことにした。土漠の中をぶっ飛ばす。同じ土漠でもイランやアフガンのような土と砂の中間ではなく、本当の土だけの土漠であり、周りには山もあって地平線目がけて突っ走るようなことはなくなった。パキスタンは暴走の国である。何が暴走かといえば、車がスピードを出すこと、これは私の回った国々の中でも一番凄かった。道路の幅は広く取ってあるようだが舗装されているのは2車線分だけで、もっと分かりやすく説明すると、未舗装の路肩部分が広く取ってあると思っていただければ良い。ここをトラック野郎が我が物顔で突っ走って行くのだ。日本のトラック野郎といえば電飾を施した車を思い出すが、パキスタンのは全面に絵が書いてある。その絵が実に上手い。他の人に自慢できる絵が書いてあるトラックが彼らのステータスシンボルなのだ。恐らくこの絵を書くプロがいるのだろう。このトラックが100キロで走っている我々の車を追い越して行くのだから恐ろしいの何のって。さらに対向車が車線をはみ出してくるので、その度に我々の車は未舗装の路肩に逃げなければならない。その時の恐ろしさは極に達する思いだ。トルコ以来暴走には馴れてきたが、パキスタンはそれを凌ぐ凄ましさがあった。

ラホールはパンジャブ州の大都市である。もしかするとパキスタン最大の都市かも知れない。人があふれており暑さも厳しくなってきた。食事をして車に戻るとラジエーターから水が漏れているのを発見した。このパキスタンでの大爆走の無理がたたったのだ。激しい漏れではないので、どうせインドで売ってしまうのだから修理はしないことにした。というよりも修

理などする余裕もなかった。ラホールからカスールという町にむかう。カスールの南にある国境の村ガンダシングワラから印パ国境を越えインドに入るのだ。当時は長い印パ国境の中で、陸路で越えられる所はここ1カ所しかなかったのである。

『インディアはどっちだ』

と聞くと、帰ってくる言葉は必ず

『なんであんなノーグッドなインドなんかに行くんだ、よせよせ』
である。

印パ両国はカシミールの領有権問題で戦争を起こし、現在もインドが核実験をすればそれに対抗しパキスタンも直ぐに行うといったあんばいで、非常に仲が悪い。実際この次の年だけか第2次印パ戦争が勃発している。また、当時は政情不安からカラコルムへの遠征もできなかった。だから前出の雲表クラブはソ連のタシケント経由でヒンズーラジに入ったのかな？よくわからない。この頃はパキスタンと中国が友好国であり、インドとソ連が友好国という構図であったと記憶している。最もこれらの構図はすべて国境問題が起因しているので今も変わらないと思うが。

10月20日、無事インドに入国する（インドでもこの辺をパンジャブ州という）。アバ国境から印パ国境までの550キロを1日半で走り抜けてしまった。国境通過は、たかられることもなく、この国としてはまあまあ

順調にいった。とくにインドの係官はウイットにとんだ愉快な奴だった。車の中の私の持ち物（何か公に詳しく説明はできない）を見ながら

『ほ～ジャバニーズか、良く来たな。どれどれ見せてもらうよ。これは何だね。ウン、おー！ユーハーストロングマン、グッドグッド』だって。しかし荷物の検査はしっかりとやられた。

ここで“カルカッタ↔ロンドン”と書いてある長距離バスに出会った。うわさには聞いていたが本当に存在しているとは思わなかった。2階建バスであり、何日間かけて行くのだろうか焦らずのんびりとヨーロッパに向かって出発して行った。料金はいくら位かかるのかちょっと気になった。乗っているお客様は西洋人ばかりだったようであるが、イギリス人がやりそうなことだと感心してしまった。

もう一つ思いがけないことが起きた。それはインド国内で車を売ることができないとわかったのである。私のバスポートには大きな車の絵のスタンプを押され、車でないと出国が出来なくなってしまったのである。もしインド国内で車が壊れたら、エンジ



カルカッタ発ロンドン行きの二階建バス

ンナンバーの部分を焼き切って持っていないと、出国のとき高い税金を取られるらしいとの話も聞いた。その訳もインドに入ってすぐに領けた。インドにはアンバサダという立派な名前の国産車があったのである。このアンバサダの良いのは名前だけで、その他はすべてひどい車であり、ボンネットを開けるとオートバイの機械程度しか入っていない、ガラガラなのである。いつエンストしても不思議ではない状態で走っている。パキスタンではダットサン等、日本の車がたくさん走っていたがインドでは殆ど見ない。この国産車を保護するために外国車の輸入を制限しているのだ。これで車を売るのはネパールしかないと悟った。はたしてネパールで売ることが可能なのか不安になってきた。それとラジエーターの水漏れも心配で、ネパールまで行けるのか心配の種は尽きない。

デリーまで行けるだけの最少限のインドルピーを持ち（ブラックマーケットを利用するつもりだから）車を発車すると、インドは今までの景色とガラリと変わり、緑が多く並木道がずっと続いている。しか

し舗装されているのは車一台分だけで、対向車があると未舗装の部分に出なければならない。それとやたら人が多くて運転には非常に神経を使う。モスクはなくなりコーランが聞こえてくることもなくなったのでなんか忘れ物でもしたようだ。ルジアサという町でホテルを探す。道路沿いの安宿が見つかり中に入るとビックリした。部屋の壁や天井にヤモリがたくさんいるのだ。電球に集まる虫を捕まえるのだが、ヤモリが動く度にドキッとする。寝ている顔の上に落ちてこないかと心配になり、ボーイに「あれをなんとかしろ」と頼んだが、ボーイは不思議な顔をして「ノープロブレム」と言ってまったく相手してくれなかった。じゃあしうがねえや、と何で落ちないでいられるのか自分で調べてみることにした。一匹を叩き落としてみると、手足に吸盤状のものがついており実によくできている。これなら落ちることはあるまいと一安心したが、人間にもドジな奴がいるようにヤモリにもドジな奴がいるだろう、と考え出すとなかなか寝つけなかった。

翌朝、外に出るとすでに表には人がたくさんいた。どうしてインドってこんなに人が多いんだろう。ちょっとした町の中は人が邪魔でノロノロでしか走れない。すでに気温は30度を越えているものと思われ、車内は40度を越しているだろう。私は今朝から下痢が止まらなくなった。腹痛もあり熱も出てきた。原因は水にちがいない。生水を飲んではいけないことなど百も承知だが、貧乏旅行にそんなことは言ってられないのだ。聞くところによると、現在はミネラルウォーターが売っているらしいが当時はそんな物はなかった。所

どころにある井戸を使わせてもらうのだが、この水といいたらドブ水と同じに見える。凄まじく汚いのだ。クソミソ一緒という言葉があるが、ガンガーの沐浴風景をみればわかるとおり、死人を流す傍らでその水を飲めるのが領ける。（ここでインド人の名誉のために言っておくが、それはガンガーに限ったことで、他の川ではそんなことはないと思うのだが？）登山用のコントロとポンベでボイルして飲むなんていう我々の予定は、机上の空論に近い。コレラ、赤痢、腸チフス、マラリヤなんて病気は日常茶飯事にあり、これに耐えうる抵抗力と体力がなければインド旅行はできない。悲しいかな私みたいな虚弱体質の人間には無理なのかもしない。とおるちゃんに言わせれば『大丈夫、人が死んでもタンちゃんは死がないから』とのお言葉ではあったが。そういう中野はこのとき一番元気だったが、後日かなりひどい病気に罹ってしまうことになる。

ラジエーターの水漏れはどんどん激しくなってきた。トルコ以来予備燃料20リットルと予備飲料水10リットルを持ち歩いてきたが、この日から水を30リットル持つように変更した。飲料水ではなく車の冷却水である。時々水を補給しないと車の水温計がレットゾーンに入ってしまうようになったからだ。さらにラジエーターのキャップを締めておくと、内圧がかかって漏れが激しくなるのでは、という考えからキャップをはずした。

今日は流石インドという光景を見た。センターラインを引いているのだがその引き方は、トラックの荷台の後部に大きな刷毛を持った人間が座り、その刷毛に



インドの三輪タクシー

塗料をつけてノロノロ走るスピードに合わせてペター、ペターっと塗っていくのであった。引く位置は古い線が微かに残っているので分かるのであろうが、出来上がったセンターラインはミミズの這ったか如くクネクネで、さらにその直ぐ後を車が走るものだから、もうシッチャカメッチャカである。今の若い女の子の言葉を借りれば“ウッソ～、もう信じられな～い”状態だった。

途中のレストランで昼食にした。レストランといっても江戸時代の茶店を想像していただければよい。それに近いものである。中に入るとおやじ（おにいさん）がびっくりしたような顔をしてでてきた。言葉が通じないのでこれから会話は実際にはジェスチャーでしたものである。

『メニューは無いのか』

『そんなもの無いよ』

『じゃ、どんな食べ物があるんだね』

『調理場にきて見てくれないか』

3人で調理場に行き鍋を見せてもらった。

『これがマトンカリー、これがポークカリー、これがチキンカリーだ』

3人とも好きなものを指差し注文した。やがておやじはカリーを持って来た。我々がカリーを食べないで待っているのをおやじは怪訝そうに見ていたが、やがて、

『どうぞ』

『ん、武器がないから食べられないよ』

『こうやって右手で食べるんだよ』

『えー、俺達の手は汚れているし、スプーンかフォークは無いのかな？』

『無い』

おやじは困ったような顔をしていたが、ちょっと待ってくれと言って走って出ていった。まもなく息を切らせて帰ってきた。手にはちゃんと3本のスプーンが握られていた。その3本は大きさ形ともバラバラで、おやじは何軒かを回って集めてきたのだろう。

『これでいいか』

『おー、サンキュー、OK, OK』

“ハーハー”というおやじの息づかいを聞きながら、また我々は辛さの為“ハーハー”と言いながらカリーを食べたのだった。

やがてデリーに着いた。牛が市街の道の真ん中で寝そべっている。インド人は牛は神聖なものとして絶対食わないし大切に扱う。しかしそく見ていると、たしかに叩いたりはしないが、交通渋滞の原因になっている場合などは牛の尻を押して退かしていた。同じ牛でも水牛は別なようで、水牛は田圃の農作業にこき使われていた。印度では牛に生まれるか水牛に生まれるかで雲泥の差になってしまうのだ。

ダイハツミゼットに似たタクシー、人力車、歩行者

が入り交じって凄い混雑で、さらにゾウまでも歩いているときはもうメチャクチャだ。車を止めると物乞いの子供達がワーコと寄ってくる。申し訳ないが私達も君たちの仲間に入りたいくらいでなにもあげる物はないのだ。窓をあけておくので、車の中に手を突っ込むもんだから発車しようにもできなくなってしまう。手の届く所に物でもあったら持っていくからしてしまうので気を抜けない。

デリーは暑い。年間通せばけして暑い時期ではないのだろうが、とにかく暑い。デリーの店は昼ころに一旦店を閉める。あまり暑いので昼休みをするためだ。そして夕方近くなつて再び開けるのだ。さすが物乞いの子供達もこの時間は姿を消してしまう。もっとも人通りも少なくなるので商売（？）にならないのだろうけど。

デリーの隣には計画的に造られたニューデリーがある。ニューデリーには日本大使館もありいわゆる官庁街である。道路も広くデリーみたいにゴチャゴチャしていなく整然としている。デリーのように物乞いの少年達も多い。デリーとニューデリーの境付近のロータリー際にあるドミトリーに宿をとった。10人部屋位の相部屋で、ここでもヒッピー達と一緒にである。ここで日本人の単独旅行者と会った。彼もヨーロッパから来たと言っていた。彼とは意気投合し日本まで一緒に帰国することになるのだが、彼の名前が思い出せない。彼の思い出は、何でか忘れたがインド人とトラブルを起こしたことである。相手は早く金を払えといふ。彼は『すでにペイしたろうが』と言っても受け付けてくれない。こんな時はほっぽり投げてしまうほかない。すると向こうは不満そうな顔をしながらも引き下がる。だって相手はすべてを知りながら不法請求をしてくるのだから。二重請求や契約外不法請求を受けることなんて毎日なんだから、とても相手の言いなりになってはいられないのだ。

翌日から調子の悪い体に鞭打って仕事を1つ1つこなしていく。まずネパール大使館に行ってビザ申請をした。2日で下りることだった。けっこうこの大使館は忙しそうだ。インドからネパールに行くヒッピーは非常に多く、カトマンズにはヒッピーがたくさんいる。これも物価が安く、過ごしやすい気候だからだろうが、まさにカトマンズはヒッピー天国なのだ。

次に日本大使館に行く。手紙を受け取るだけなのだが、大使館内に入るとほっとするのはなぜだろうか。別に歓迎されているわけでもないし、きっと冷房がきいているためだろうと思う。新聞で日本の出来事を知ることができるのはこの時だけである。

東京銀行に行くと日本人が対応してきた。しかし、なんの用事で東京銀行に行ったのか思い出せない。イスタンブルでおやじから送ってもらった3万円の残

りの1万円を交換したとは考えられないんだが。最後の1万円はどこで交換したのかは記憶がない。もしかするとイスタンブールで、すでに中野達の金を使い込んでいて返したのかも知れない。几帳面なトオルちゃんに会計は任せておいたので私には分からぬ。

次はJALオフィスに行く。イランでの滞在が短かったので予定より手持ちの金があるのと、インドでは車が売れないことが分かったこともあって、なんとかネバールまで行ける見通しがついたので、ニューデリー～羽田間のチケットをカルカッタ～羽田間に変更するためであった。入って行くとインド人のカウンター嬢が出てきた。

『ハロー』と話しかけると、思いがけない返事が返ってきた。

『こんにちは』

『あれ、日本語が話せるんですか』

『はい、話せちゃいますよ』

聞くと日本にいたことがあるのだという。最近日本にも山形弁を話すアメリカ人がいるが、このインド嬢は日本のどこにいたのか、

『どこから来ちゃったんですか』とか、

『ほんまですよ』

など関西弁交じりのメチャクチャな日本語を話すので、彼女はなんちゅう日本人に教わったのかと、中野と顔を見合わせ大笑いしてしまった。

あるとき路上でインド人が声をかけてきた。マネーチェンジしないかと言う。闇ドル屋だ。レートを聞くと公式レートより5割増だった。それを聞いてすぐにインチキだとわかった。ここに来るまでに我々も相当鍛えられてきた。俺たちや昨日今日始めた旅行者じゃないぜ。よし今度はこっちがからかってやろう。

『5ドル交換してくれ』

『じゃあドル紙幣を出してくれ』

『おまえが先にルピーを出せよ』

『いやドルを確かめてからだ』

片手には雑誌みたいな物を持っており、トルコのインチキ野郎と全く同じ手口だ。手品の種を明かしてやろうとドルを渡してから目を離さないでいた。奴は紙幣を折り曲げたり裏返したりし始めた。これもトルコと全く同じだ。逃げられないよう私は相手のベルトを後ろから掴んだ。奴は私達の目が気になるのだろう。緊張のあまり手が震えている。そのうち怪しい動きをし始めたときを見計らって私はそのドル紙幣を取り上げた。

『おまえみたいなインチキ野郎とは取引しないよ』

男は呆気にとられたように一言も言わず立っていた。

インドのブラックマーケットは、アフガンのように相手がホテルまで来て交換するようなことはなかった。声をかけてくる奴が自分で交換することは殆どなく、

バザールの中まで客を案内していくだけである。このバザールに入るときが不安で緊張するときだ。ワード寄ってたかって身ぐるみ剥がされても不思議のない雰囲気だからだ。バザールの一画に1坪位の格子で囲まれた所（江戸時代の勘定場を彷彿させる）があり、客はそこの主人と取引をするのだ。主人は男達をあごで使い、身分の違いがはっきりわかる。つまり声をかけた男はリベートを貰うだけなのである。客とのレートが良く契約できたときは自分の取り分が多くなるわけだ。したがってあるレート以上の取引をしても自分が儲からないのでそれは絶対しない。だから5割増なんて野郎はインチキといって間違いない。インドでもせいぜい3割増が限度であろう。このバザールの中のブラックマーケットは闇ドル交換だけが仕事ではなく、町の金融業のようだった。つまりサラ金、高利貸といったノンバンクである。

インドの女性は彫りが深くとても魅力的だ。黒い肌に眉間の赤いボツン（なんていうのか知らない）がまたよく似合う。回教徒の国のように全身を隠すことなく、サリーがなんとも色氣があって良かった。でも、身分の高い階級は知らないが、普通のインド人はトイレに紙を使用せず、左手で始末をするのであるが、それを考えると彼女にしたいとは思わなかった。身分の違いは着ている物である程度わかるし、金持ちは運転手を雇い自家用車で移動するが、その車がアンバサダなのはちょっといただけなかった。いまでもカースト制が歴然として残っているようだった。

トイレの話になったので付け加えると、インド人やパキスタン人がオシャッコするときは男でもしゃがんでするのだがトイレのことは続編で書きたいと思う。

連日続いている私の下痢は治まる様子がなく、しかたがないので食べ物をバナナだけにすることにした。バナナは子供の頃から、お金持ちになったら一度いいから腹一杯食べてみたいと思っていた果物である。店で買い求めると1本1円だった。モンキーーバナナという小さい物だったが、日本の物と違ってとても甘くて、1日食べたら2日目はもういやになってきた。夢を果たした私は、この時以来現在でもバナナは好きではあるが腹一杯食べたいとは思わなくなった。路上の大八車の上にヤシの実を並べてヤシジュースが売られている。水の代わりにこれを飲んでみた。片手でヤシの実を押さえ、ナタでパンパンパンと切っていくのだがこれが実に上手である。飲みやすいように飲み口まで作ってくれた。しかし私は、なんか青臭くて好きにはなれなかった。バナナとヤシジュースが功を奏してか腹の調子は少しづつ良くなっていた。

この頃になると我らが愛車オペル1000GTは水温計がすぐレッドゾーンに入ってしまうようになっていた。焼けているところに水を入れるとゴボっと吹き

上がる。これでエンジンは大丈夫なのだろうか。

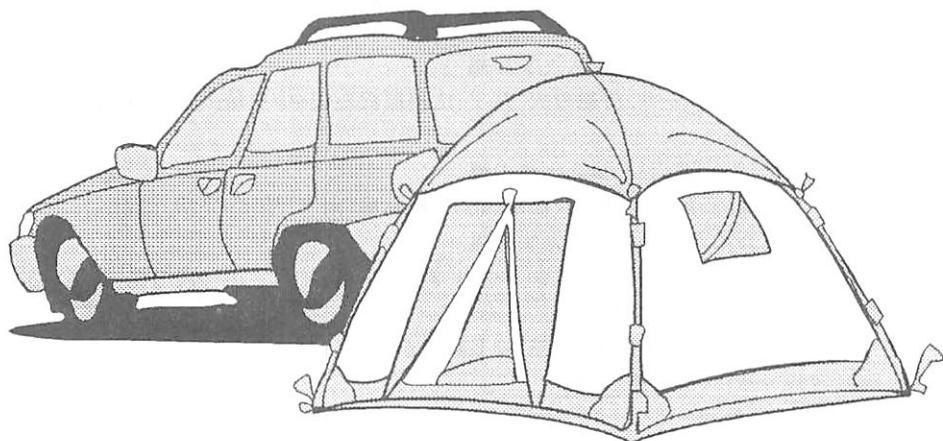
40度近いだろうか暑さも厳しく、ドミトリの居心地もあまり良くないので、一連の用事が終わったらネパールに向け出発することにした。

続編につづく

いよいよこの旅も終盤を迎える。厳しかったインドからネパールへの峠越え、これが本当のインドなんだと強烈なカルチャーショックを受けたカルカッタ、そして最後の夜を過ごした香港。羽田に着いたは良かったが、あれ！電車賃が……。

(本図一統 記)

後編を書いた後、シマちゃん（嶋村幸男）と連絡がとれ、何とシマちゃんは旅行中に書いたメモを残していることが分かりました。パキスタンでお世話になった村の名前はハッサン・アブドール村と判明しました。インドで知り合った青年の名前はイディスミオ（出井？）といって大阪の池田市の方でした。彼をこれから探してみようと思いますが、関西方面の方で心当たりの方がありましたら教えて下さい。



《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

◎Rohman No. 165 1999. 1 B5 56P 浦和浪漫山岳会

冬山合宿・大津岐峠・大戸沢岳、山毛櫟沢本沢右岸尾根～稻子山南峰～坪入山、小豆温泉～三岩岳東南尾根、上越・平標山～仙ノ倉山、茂倉岳北西尾根～茂倉岳、茂倉岳～一ノ倉岳ほか

◎Rohman No. 166 1999. 2 B5 32P 浦和浪漫山岳会

南会津・家向山、日光・鬼怒沼山ほか

◎Rohman No. 167 1999. 3 B5 40P 浦和浪漫山岳会

八海山生金尾根、冬の集中・大嵐山、蔵王・OBスキー山行、南会津・小野岳ほか

◎わらじ No. 514 1999. 1 B5 30P わらじの仲間

清水～大鳥帽子山西尾根～JCピーク～朝日岳、蕨山～川乗山、西方見聞録ほか

◎わらじ No. 515 1999. 2 B5 26P わらじの仲間

剣岳・源治郎尾根、八甲田・大岳、朝日・古寺山～小朝日岳～大朝日小屋、黒部別山、南尾根～剣岳ほか

◎わらじ No. 516 1999. 3 B5 12P わらじの仲間

越後・大割山北東尾根～北西尾根、奥武藏・吉田山ほか

◎逍遙 No. 92 1999. 1 B5 14P 逍遙溪穀会

富士雪上訓練、奥多摩・秋川盆掘川オリソコナイ沢、黒戸尾根～甲斐駒ヶ岳～栗沢山～仙丈ヶ岳ほか

◎逍遙 No. 93 1999. 2 B5 8P 逍遙溪穀会

西吾妻山、八幡平・国見台、那須・鎌房山、奥多摩・秋川中山沢ほか

◎逍遙 No. 94 1999. 3 B5 12P 逍遙溪穀会

谷川・阿能川岳、上信越・湯ノ丸山、烏帽子岳、奥多摩・秋川養沢川鈴ガ尾沢ほか

◎Next! No. 37 1999. 1 B5 12P 山岳渓流釣り集団むげん

奥多摩・ツヅラ岩ほか

◎Next! No. 38 1999. 2 B5 20P 山岳渓流釣り集団むげん

集中に向けてほか

◎Next! No. 39 1999. 3 B5 20P 山岳渓流釣り集団むげん

伊豆・幕岩ほか

◎とまのかぜ No. 74 1999. 1 B5 35P 童人とまの風

伊豆・大川川大深沢、丹沢・ボッカ、房総の沢、八ツ・広河原沢左俣～中央稜、日光白根山、谷川・茂倉岳、八ツ・権現岳、西表の沢ほか

◎とまのかぜ No. 75 1999. 2 B5 43P 童人とまの風

房総の沢、零石スキー場～三角山、八甲田・横岳、北ア・蝶ヶ岳、南ア・聖岳～光岳、ほか

◎とまのかぜ No. 76 1999. 3 B5 25P 童人とまの風

八ツ・阿弥陀岳広河原3ルンゼ、西上州・ゴシュウ山、湯河原・幕岩、西上州・3段の滝、足尾・松木沢ほか

◎山紫水明 No. 1999. 1 B5 12P 山旅の会

岩トレ、タカマタギ山、八ツ・広河原沢、上越・神楽峰ほか

◎山紫水明 No. 1999. 2 B5 6P 山旅の会

東籠ノ登山山スキーほか

◎山紫水明 No. 1999. 3 B5 4P 山旅の会

奥秩父・乙女沢ほか

◎すずらん通信 No. 214 1999. 1 B5 8P 鈴蘭山の会

富士雪上訓練、八甲田山ほか

◎すずらん通信 No. 215 1999. 2 B5 12P 鈴蘭山の会

管平・根子岳、ビーコン特集ほか

◎すずらん通信 No. 216 1999. 3 B5 12 鈴蘭山の会

雪崩講習会・神楽峰、梅峰、美ヶ原～霧ヶ峰ほか

会報

◎年報 溪 NO.11~15合併号 1999.3 B5 255P 遊遊渓稜会

沢の部として、朝日連峰13本、東京近郊44本、上信越30本、会越那須12本、アルプス3本、関西3本、その他4本、山の部として、無雪期5本、積雪期32本など記録多数

◎メラピーク登山報告書 1999.2 A4 62P メラピーク同人

元当会会員の川上浩史がメラ・ピークに速攻登山した報告書。彼は会社を退職して現在大阪の両親の所に戻っており、新会社に勤めている様です。

以上閲覧したい方は本図まで



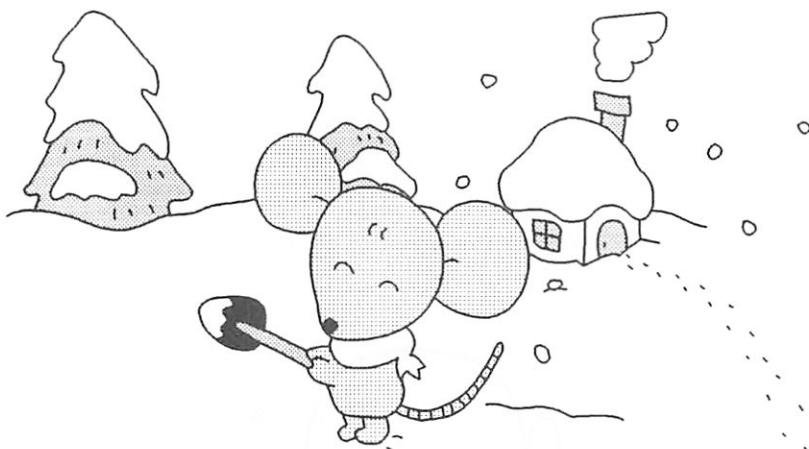
編集後記

我が会もようやく期待の新人が入ってきた。意気込み、山への取り組み方を見ているとすごく期待が持てる新人達である。やはり神（山の神）は我が会を見捨てなかった。

まだ、未熟ではあるがそれだけに未知数の可能性を秘めている。彼らも今、貪欲に山に向かっているようだし、有望株だ。やはり若い息吹は会を活性化できる一番の源だと感じた。

技術、経験を重ねてきた達人でも後継者がいなくては、マンネリ化してしまうし新鮮さも欠けてしまう。これからこのR&Vも新しい息吹によって斬新な会報になっていくだろうと期待している。

（編集長）



季報「R&V」第32号 発行1999年冬 発行者：本団一統
発行所：ACC-J茨城 〒306-0501 茨城県猿島郡猿島町逆井318
生井一男

編集者：生井一男

印刷所：やまと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団